令和6年度 小平市立小平第三中学校 学校評価報告書

学校教育目標 ○健康「ゆたかな心 たくましいからだ」 ○実践「進んで学び、積極性を養う」 ○協力「ひとりとはみんなのために みんなはひとりのために」

目指す学校像(ビジョン)

- 【目指す学校像】●(生徒)安心して自己実現ができる学校 ●(保護者)信頼でき協力したくなる学校 ●(教職員)チームとして力を生かし、主体的に課題を解決できる学校 ●(地域)内外に開かれ地域とともに歩む学校
- 【目指す生徒像】●生きる力をもつ生徒 ○心身を鍛錬し、自分の責任を果たすことのできる生徒(自分を考える力) ○自分の個性を伸ばし豊かに表現できる生徒(学習を考える力)○思いやりのある生徒(人を考える力)
- 【目指す教員像】●生徒を慈しみ、良さを伸ばす。●日々研鑽に努める。●教育公務員としての使命と自覚をもち、服務規律に勤める。●保護者・地域の信頼にこたえる。●人の手本となることを銘記し、教訓とする。

前年度までの学校経営上の成果と課題

教育活動アンケートで「楽しく学校に通えている」と肯定的に回答した生徒は85%であった。保護者教育活動アンケートで、肯定的回答は79%であった。概ね学校の教育活動にに対して肯定的に捉えてもらっている。課題としては、効率よく教え込む授業スタイルが主となった。協働的な学びの推進が必要である。学習者用端末の授業や他の取り組みでの更なる活用も課題である

	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策
		取組指標	成果指標		取組指標	成果指標		
学力向上	<ul style="list-style-type: none"> ・全教科での統一した授業形態(3中スタンダード)の実施。 ・英語で指導方法改善授業を実施、1年生の数学ではチームティーチングを実施し個別指導の充実を図り、学力の底上げをする。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・3中スタンダードは継続して実施を推進している。また、個々の授業の振り返りのため授業チェックシートを用い自己点検を行っている。教員の授業改善の意識が高まってきている。 ・英語の少人数、数学のTTによる授業は予定通り実施ができています。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちは落ち着いた状態で授業を受けている。 ・授業ではICT機器(学習者用端末、大型モニター)の利用などさまざまな工夫が見られる。生徒の興味・関心を引き出せるよう考えられている。ICT機器の活用もよいが、対話の場面が多くると良いと感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒による各教員の授業評価は肯定的な回答が80%以上を占め、各教員が目標とした値を達成できた。教育活動に関するアンケートでは肯定的な回答をした生徒が86%、保護者は72%と昨年度よりも向上している。今後も個々の授業の充実を努める。また、生徒と保護者の差が見られるので保護者の理解を深めるべく授業公開や取り組みの紹介方法などを検討していく。 ・学習者用端末の利用状況が伸びている結果が得られた。さらに3中スタンダードの実施を高めより良い授業づくりを目指したい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・教員のICTを活用能力を上げることを目指し、校内研修会において学習者用端末を用いた授業を学期1回実施するとともに一人1回以上授業を公開する。 ・研究発表会などへ参加を推奨し内容を校内で共有する。 	2	3	<ul style="list-style-type: none"> ・学習支援アプリ(スタディサプリ)の導入をおこなった。情報担当、研修担当が中心となり学習者用端末の効果的な使用方法の紹介、外部講師によるスタディサプリの使用方法などの研修会を実施した。活用を進めている。 ・教育活動や生徒会での活動でのICT機器の活用が図られ、に効果的な処理ができた。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度より導入されたロイノートに関する研修、活用した事例発表会を実施することができ、より良い授業づくりに生かすことができた。また、学習支援用アプリ(スタディサプリ)の活用も多くアクティブ率が93%と全国平均を大きく上回っている。家庭学習などでの利用を推奨し、今後もより良い活用を進めている。また、不登校生徒対応へも活用の幅を広げていく。 	
健全育成	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒専門委員会を支援し、生徒の主体的な取り組みを大切にしながら落ち着いた学習環境と生活環境を整備する。 ・生徒の発想を引き出し、生徒会・委員会活動を促進させる。また、指導者による指示を段階的に少なくし、生徒の自主性を高める。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・小平特別活動の日で実施した学級活動に対する準備で行った生活スローガンの設定、話し合い活動の推進など生徒の活動が活性化している。後期の委員会より3中SDGsを考慮した活動を実施していく。 ・本年度、生徒会役員の上候補者が増えている。生徒の生徒会活動に対する意識の高まりがみられる。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会や専門委員会の取り組みが活発でよい。さらに生徒が主体的に活動ができる場が増えたとはいえる。 ・伝統として、あいさつをすることを大切にしており、あいさつが自然に交わされる状態が素敵である。 ・多くの部活動などで生徒の頑張っている様子が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3中SDGsを設定し、それに関連した生徒会・委員会などでの話し合いを通し、委員会での行事や取り組みが行われ、生活環境が豊かなものとなっている。今後も生徒の豊かな発想を引き出し、充実したものにしていきたい。 ・あいさつに対する生徒の意識は高いものが見られる。教育活動に関するアンケート「あいさつ・身だしなみ・ルールを守る」では、肯定的な意見は96%という結果が得られた。今後も育んでいく。
	<ul style="list-style-type: none"> ・月に1回アンケートを実施し、生徒の状況把握し、複層的な視点で生徒の心情を把握するとともに指導に活用する。 ・生活指導部の組織力を高め、いじめや問題行動の情報収集と支援について共通理解を図り、早期対応、早期解決を目指す。 ・道徳的心情を育む取り組みの実施。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・生活アンケートを月に1回実施が有効である。繰り返し実施することで生徒も書きやすい(相談しやすい)状態となり、早期にいじめや困り事の防止や解消につなげることができている。 また、週に一度の生徒指導部会、特別支援部会、企画委員会にて情報共有が図られ、組織的な対応が行えた。 ・道徳の授業では学年内にてローテーション道徳の実施など多様な内容での授業が実施できている。道徳授業公開講座にて共通課題にて公開を行う予定である。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> ・生活アンケートの活用が図られ、いじめや問題行動に対する対応ができています。しかし、アンケートでわかるなど回答する割合がある。その点の改善が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・継続して実施している生活アンケートは効果大きいものがある。相談窓口の一つとして機能しており、生徒の悩みの解消、いじめの早期発見、など生徒の生活の安定につなげることができている。 ・企画委員会、生活指導部会、特別支援部会(校内委員会)にて生徒に関する情報交換が細かくできており、対応が適切にできている。今後も続けていきたい。また、道徳の教科を中心に自己肯定感を高める取り組みを学校全体の活動の中で進めている。
キャリア教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動や地域行事への参加、地域での清掃活動の実施など地域で活躍できる生徒の育成を図るとともに、自己の将来を描くことのできるよう、生きる力を高める取組を実施する。 ・地域の人材、地域の力の活用を図り講演会などを実施する。(生き方講演会、職場体験、職業調べ、上級学校訪問、道徳、体験授業など) 	2	1	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生では職業調べ学習を実施、働くことの意義など理解を深めることができた。2年生では職場体験学習を10月に実施。3年生では進路選択に向け、講演会などを通して高校での学習や生活、入試の内容の理解を進めた。それぞれ取り組みが生徒のキャリア形成に役立っている。 ・地域の状況など、この取り組みのあり方などを検討する必要がある。11月に実施さわやかコミュニケーションでの実施する内容を検討していく。保護者への啓発が課題である。 	2	3	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生の職業調べ、2年生による職場体験学習、3年生の進路学習など計画的に行われている。地域人材の活用などさらなる充実を図ってほしい。 ・昨年度にそ期続き、特別支援級の生徒が行事の参加を通して通常級生徒との交流が図れている。また、啓発授業の実施など良い取組ができています。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動に関するアンケート結果でキャリア教育に関する項目において肯定的な回答は、生徒86%、保護者66%であった。生徒たちは様々な取り組みを通し、自身の将来について考える機会をもてたと考える。事後の発表会を設ける取り組みの成果を示すなど保護者側へ周知していきたい。また、今後、CSとの連携を図り、職業講和などで地域の人材を活用するなどキャリア教育に関する取り組みを充実させていきたいと考える。
	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会や音楽祭などの行事を通し、交流を深める。特別支援学級の教員による出前授業を通し、障がい者理解を深める。 ・通常の学級と特別支援学級の相互の関わりを深める。 	2	1	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度も運動会の5組(特別支援学級)が加入し、行事を共に実施することができた。応援合戦では一緒に演技を行い交流を深めることができた。 ・特別支援学級の教員により1年生にて特別支援の生徒理解に関する授業を実施した。今後も継続していく。 ・保護者への啓発が花袋である。 	2	2	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学級の生徒がすべての学校行事に参加することができた。また、特別支援学級教員による通常級生徒への啓発授業の効果も大きいと感じる。それにより交流も大きく深まっている。今後も継続・発展させていきたい。 ・特別支援学校との副籍交流の充実や福祉体などの充実を図り、障害者への理解、思いやりの心を育んでいきたい。 	
特別支援教育	<ul style="list-style-type: none"> ・教員、生徒のとの関係づくりを重視するとともに特別支援校内委員会へ対応を検討する。 ・スクールカウンセラーのやスクールソーシャルワーカーの活用や外部関係機関との連携、訪問活動により相談・支援体制を充実させる。 	2	2	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援校内委員会を毎週開催し、生徒の状況と対応について情報交換を行うことができています。生徒の状況に合わせ様々なニーズに応じていくことが課題である。生徒の困り感に応じ、具体的な支援方法についての検討を進める。この対応に対し、今年度より特別支援部を設置し専門的に対応を行っている。 	3	2	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援校内委員会にて生徒への支援内容がしっかりと検討とされ、活用が進んでいると感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動に関するアンケートにて「カウンセラーやソーシャルワーカーなどを通し、悩み事や困り事に対して相談できる体制」に関し肯定的な意見は生徒85%と昨年度同様であった。保護者の割合も向上している。特別支援部からの生徒への働きかけにより、SCへの相談アプローチができています。さらに不登校生徒への支援を充実させていく。
	<ul style="list-style-type: none"> ・教員一人一人が時間を意識した働き方を進め、週当たりの在校時間が60時間を超えないことを目標とする。 ・会議の精査や学校行事の精選、ライフワークバランスなどについて、自己申告書に具体的な目標を示し、取り組む。 ・服務防止研修、チェックシートの実施。 ・年次有給休暇の取得目標を明示し積極的な休暇取得を促す。 	2	3	<ul style="list-style-type: none"> ・会議開始時間、終了時間を厳守、出張後には学校にもどることなく帰宅をすることを推進した。概ね達成ができています。 ・夏季休業中での休暇取得を推進。取得率91%(8月末まで) ・毎月チェックシートによる個人チェック、学期末における服務研修の実施を行い服務遵守に関する意識を高めることができています。教員相互による注意、声掛けなどを実施していく。また、服務研修を適宜実施している。 	2	3	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の皆様の時間を惜しまない日々の努力はたいへんありがたい。また、部活動の指導などご苦労様です。 ・健康面に十分に配慮をしてほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・冬季に部活動の最終下校時間を早めることで、教員の在校時間を1学期と比較して2・3学期には約5～10%削減させることができた。(学校の制度改革を進めた結果、教員に余裕ができ、病休も減少している) ・教員の在校時間について、例年を100%として比較すると96%に減少している。これは、会議の精査、学校行事の精選を重ね、教員の業務効率化が進んだためと考えられる今後も、教員の勤務時間の超過の解消を課題としと組んでいく。